

## 14. 歯科X線撮影に関する実態調査：本学付属病院におけるデンタルおよびパノラマ撮影について(東日本学園大学歯学会第10回学術大会(平成4年度))

著者名(日)	川瀬 千景, 小林 光道, 輪島 隆博, 金子 昌幸
雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	11
号	1
ページ	144
発行年	1992-06-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1145/00007752/">http://id.nii.ac.jp/1145/00007752/</a>

管・腺体内導管とも結紮後28日目まで拡張傾向を示し、その後の変化はわずかであった。腺体内導管の拡張、狭窄、蛇行も認められた。腺体の縮小はその後さらに進行

していった。そして画像解析装置による測定では、これらの変化の経日的な動向を明確に示すことができた。

#### 14. 歯科X線撮影に関する実態調査

—本学付属病院におけるデンタルおよびパノラマ撮影について—

川瀬千景<sup>1)</sup> 小林光道<sup>1)</sup> 輪島隆博<sup>2)</sup>  
金子昌幸<sup>1)</sup>  
(歯科放射線<sup>1)</sup> 放射線部<sup>2)</sup>)

本大学附属病院における歯科受診患者のX線撮影状況とその傾向を把握することを目的に調査を行った。調査方法は、1988年から1990年までのX線撮影照射録からデンタルおよびパノラマX線撮影を行った患者を抽出し、各項目別に分類し調査を行った。

##### 1. デンタル撮影

- 1) 撮影総件数は、18278件、撮影総枚数は31042枚で、デンタル撮影患者一人に対する平均撮影枚数は約1.7枚であった。
- 2) 男女別では、件数は女性は男性の約1.2倍、枚数では差はわずかであった。
- 3) 月別では、件数、枚数ともに3月が最も多く、8月で少なかった。
- 4) 年齢別では、件数は20歳代、30歳代で多く、平均撮影枚数は、40歳代、50歳代で多かった。
- 5) 部位別では、上顎大白歯部、切歯部、下顎大白歯部の撮影頻度が高かった。

##### 2. パノラマ撮影

- 1) 撮影総件数は4009件で、パノラマ撮影にデンタル撮影を併用した件数は1131件であり撮影総件数の28.2%を占めた。また、パノラマ撮影に併用したデンタル撮影枚数は2134枚で、両者を併用した患者1人当たりのデンタル撮影平均枚数は約1.9枚であった。
- 2) 月別では、パノラマ撮影総件数および両者を併用した件数ともに3月が多かった。
- 3) 年齢別では、パノラマ撮影件数及び両者を併用した件数ともに10歳代が多かった。
- 4) パノラマ撮影に併用したデンタル撮影部位では、上下顎とも切歯部で10歳代が多かった。下顎では、30歳代以降で臼歯部の頻度が高い傾向があった。

本調査から、大学病院としての歯科X線検査内容の特殊性や地域の特徴が認められた。本大学の平均撮影枚数は、他の報告と比較して少ないが、今後とも unnecessary な撮影は避ける考慮が肝要であると思われる。

#### 15. PCNA免疫組織染色およびAgNOR染色を用いた増殖細胞の検討

—唾液腺悪性腫瘍について—

越智眞理, 定岡敏之, 神田正巳  
長江俊一, 三浦義隆, 大内知之  
中出 修, 賀来 亨  
(口腔病理)

**【目的】** DNA polymerase- $\delta$ の補助蛋白であり、増殖細胞核に特異的に存在するPCNA (proliferating cell nuclear antigen) およびribosomal transcriptional activityを反映しているAgNOR (nucleolar organizer regions) は共に細胞増殖能との関連性が近年多方面で指摘されている。

そこで今回われわれは、唾液腺腫瘍を用いたPCNA陽

性率、ならびにAgNOR数を計測することにより増殖細胞の数の違いについて検索を行った。

**【材料及び方法】** 良性多形性腺腫、多形性腺腫内癌、腺様嚢胞癌、粘表皮癌、腺癌、未分化癌の手術材料のホルマリン固定・パラフィン包埋薄切切片を使用した。

PCNA免疫組織化学染色は、Daco社製抗体を用いたABC法で、AgNOR染色はCrockerらの鍍銀法に準じて